『古代アメリカ』15, 2012, pp.33-50

＜調査研究速報＞

# メソアメリカ文明の環境利用例としての緑・青色石製品

## ―マヤ文明の緑色黒曜石製石器とアステカ王国のトルコ石製装飾品の社会的な意味―

青山和夫（茨城大学）
井関睦美（明治大学）

## 1. はじめに

メソアメリカ文明は、石器を主要利器としながらも、神殿ピラミッドが林立する都市を中心に諸王国を築き、文字、暦や天文学を発達させた、極めて洗練された「石器の都市文明」であった［青山 2007］。メソアメリカでは、南米のアンデスと同様に、鉄は一切使用されなかった。金や銅などの大部分の金属製品は、装飾品や儀式用具であり、それらが頻繁に使用されたのは9世紀以降であった。旧大陸の「四大文明」や南米アンデスのインカ帝国とは異なり、メソアメリカは政治的に統一されず、多様な諸王国が共存した（図1）。メソアメリカの事例は、統一王朝＝文明という見方への反証といえよう。

図1　メソアメリカの代表的な遺跡と黒曜石原産地（青山作成）

メソアメリカの大文明は、熱帯雨林、熱帯サバンナ、ステップ、針葉樹林を含む、多様な自然環境で発達したのであり、乾燥地域の大河流域という旧大陸の「四大文明」とは大きく異なる。メソアメリカの先住諸民族の間では、多様な自然環境に刺激されて、原材料、特産作物、製品などの遠距離交換、地域間交換や地域内交換が活発に行われた。支配層は、物資だけでなく、知識、観念体系や美術様式などの情報も盛んに交換した。つまりメソアメリカでは地方色豊かな諸王国が、遠距離交換網を通して歴史・文化伝統を創造し続けたので、一つの大文明としてくくれるのである［Carmack et al. 2007: 6］。

先スペイン期の大半を通じて、遠距離交換品は、支配層の間で交換された少量の威信財や美術品が主であった。代表的な威信財の一つが、先古典期から重宝された翡翠製装飾品である。翡翠は、緑色の硬い玉であり、メソアメリカではマヤ高地の一部をなすグアテマラ高地だけで産出する。先スペイン期のメソアメリカの人々にとって、緑と青は世界の中心の神聖な色であり、権力の象徴の色でもあった。方角を示すマヤ文字によれば、東西南北の色は、それぞれ、赤、黒、黄、白であり、世界の中心の色は緑か青である［Miller and Taube 1993: 65］。翡翠は、その神聖な色、希少性、硬さゆえに、メソアメリカの支配層の間で威信財として金よりも貴重であった［Lange 1993］。

青山が 2005 年から参加しているグアテマラのセイバル遺跡の発掘調査によって、先古典期中期の初頭（前 1000 年頃）に建造された、マヤ文明で最古の公共建築と公共広場を検出した［青山 2012a; Inomata et al. 2010］。つまり、セイバル創設の最初から「神聖な文化的景観」が造り出されたことがわかった。さらに、公共広場の最初の床面の下にある自然の地盤の中から、翡翠や蛇紋岩を含む硬質の緑色石製磨製石斧が出土した。磨製石斧は、前 1000 年頃にセイバル創設の儀礼の一部として埋納されたものであり、これもマヤ低地で最古の出土例である。

スチュワートの図像研究によれば、緑色石製磨製石斧は、公共建築や公共広場の神聖性を更新する、神聖なトウモロコシの穂あるいは種を象徴した［Stuart 2011: 79］。同様な緑色石製磨製石斧は、メキシコ湾岸低地に栄えたオルメカ文明（前 1200～前 400 年）やメキシコのチアパス高地の諸遺跡でも埋納された。この時期のメソアメリカ南部の支配層は、緑色の磨製石斧を埋納する観念や知識を共有していたのである。

## 2. 問題の所在と本論の目的

メソアメリカ考古学では、翡翠［たとえば、Lange 1993; Thouvenot 1982 など］と比べると、それ以外の緑色石製品に関する体系的な研究が不足している。また一般的に考古学の研究において、遺物の社会的・象徴的な意味を探求するには困難を伴う場合が多い。さらにメソアメリカ文明を代表するマヤとアステカは、それぞれ個別に研究され、メソアメリカ全体の脈絡において通時的に論じられることはあまりない。青山が領域代表、井関が研究分担者をつとめる文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」（平成 21～25 年度）では、環太平洋の非西洋型諸文明（メソアメリカ、アンデス、琉球列島、東南アジア、オセアニアなど）の盛衰と環境システムの変遷史の因果関係を詳細に明らかにすることが一大目的である［たとえば、青山 2012b; 本谷 2012; 井上 2012; 井関 2012; 米延 et al. 2012］。

本論は、この大きな学問的な枠組みの中で、青山と井関が公刊した博士論文の修正加筆版［Aoyama

1999; Izeki 2008］にその後の知見と考察を加えて、「石器の都市文明」であったメソアメリカ文明の環境利用の事例研究として、先スペイン期に遠距離交換された翡翠以外の緑・青色石製品の社会的な意味を通時的に検証する。具体的には、マヤ文明のコパン遺跡から出土した緑色黒曜石製石器とアステカ王国のトルコ石製装飾品の交換について実証的に論じていこう。

## 3．マヤ文明のコパン遺跡における緑色黒曜石製石器の遠距離交換

マヤ低地南東部のコパン遺跡は、19 世紀末から 100 年以上にわたって調査され、マヤ地域において支配層だけでなく全社会階層について最も良く研究された地域になっている。高倍率の金属顕微鏡を用いた石器の使用痕研究と出土地点の分析を通して、メキシコ中央高地産の緑色黒曜石製石器の社会的な意味について実証的に検証することが可能である。青山は、地域内交換、地域間交換および遠距離交換を研究するために、コパン谷や北東約 50km にあるラ・エントラーダ地域の中小遺跡を含む、様々な地点の発掘調査で出土した 9 万 1916 点の打製石器を分析した［Aoyama 1999］。これは、マヤ考古学で最大の石器のデータベースの一つである。石器の年代は、先古典期前期（前 1400～前 1000 年）から後古典期前期（後 900～1200 年）にわたる。

コパン谷では打製石器の原石として地元産のチャートが豊富であり、主に剥片が各世帯で製作された。しかし、コパン谷における石器の原材料の主流は黒曜石であった。メキシコ、グアテマラ、ホンジュラスの高地の少なくとも 7 つの産地から相当量の黒曜石がコパン谷へ持ち込まれた。打製石器の石材は、先スペイン期を通じて 70%以上が黒曜石であり、石刃をはじめとする多様な石器が製作された（図 2）。

諸王がコパン王国を発展させる上で政治経済的に重要だったのは、実用品のイシュテペケ産黒曜石で作られた石刃核の地域内・地域間交換であった［Aoyama 2001: 355］。コパンは、マヤ高地のイシュテペケから北東 80km に位置し、大部分の黒曜石が同産地からもたらされた。コパン王朝は、イシュテペケという良質の黒曜石産地に比較的近いという立地を大いに利用して、石刃核を産地から直接に入手した。このことは、黒曜石製石刃核を遠距離交換したマヤ低地の大部分の都市と対照的である。王を中心とする宮廷によるその統御は、他の要因と相互に作用して、コパン王国を発展させる上で大きな役割を果たした。

初代キニッチ・ヤシュ・クック・モ王は、426 年にコパン王朝を創設し、直線距離だけでも 1200km 以上離れている、メキシコ中央高地パチューカ産の緑色の黒曜石製石器を完成品（主に石刃と少量の両面調整尖頭器）として搬入した（図 3）。緑色黒曜石製石器は、古典期のマヤ支配層にとって、当時のアメリカ大陸最大の都市テオティワカンとの交流や関係を強く誇示する社会的に重要な威信財の一つであった。テオティワカンは、パチューカから 50km に立地し、緑色黒曜石製石器の遠距離交換に関わっていた［Spence 1996］。緑色黒曜石製石器は、産地が近いメキシコ中央高地では広範に流通したが、古典期前期（250～600 年）のマヤ地域では、大都市に集中的に分布し、小都市ではほとんど出土しない。緑色黒曜石製石器は、世界の中心の神聖な色の威信財として、古典期前期には少量がマヤ支配層の間を流通した。

コパンの中心グループの「ヤシュ建造物」は、キニッチ・ヤシュ・クック・モ王の命令で建設されたが、そこから出土した黒曜石製石器に緑色黒曜石が占める比率（9.8%）は、古典期マヤ低地で

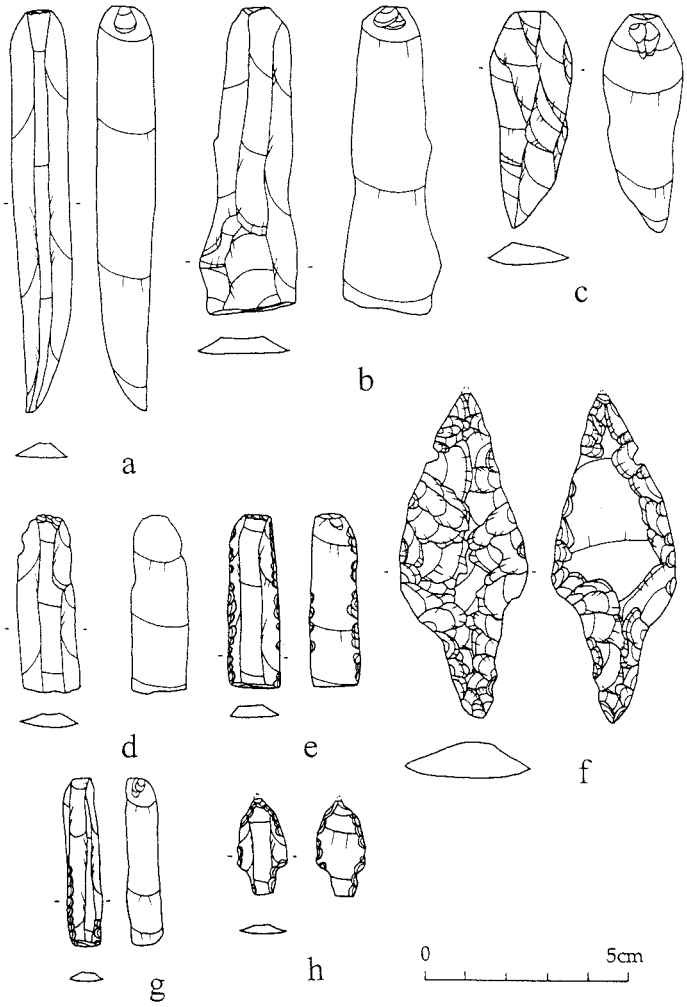


**図２　古典期前期のコパン遺跡の黒曜石製石器（Aoyama 1999: Figure 7.17 より作成）**
**g・h はパチューカ産緑色黒曜石製、残りはイシュテペケ産黒曜石製**
**c.小型打撃石刃、f.両面調整尖頭器、h.石刃鏃、残りは石刃**

最も高い数値を示すものの一つである［Aoyama 2001: 352］。この数値は、古典期マヤの大都市ティカル［Laporte 1988: 170, 172］よりは低いが、コパンよりもテオティワカンに近く、テオティワカンの支配層と直接的に交流したマヤ高地の大都市カミナルフユ　［Kidder et al. 1946: 136, 138］やメキシコ湾岸低地のマタカパン［Santley 1989: 140］よりも高い。対照的に、コパンの近隣の中小都市では、緑色黒曜石製石器は皆無に近い。黒曜石製石器に緑色黒曜石製石器が占める比率は、キリグアで 0.06%［Stross et al. 1983: 335］、ラ・エントラーダ地域で 0.06%［Aoyama 1994: 140］、チャルチュアパで 0.04%［Sheets 1978: 13］にすぎない。

コパンにおいて緑色黒曜石製石器の比率が高いのは、キニッチ・ヤシュ・クック・モ王が、テオティワカン出身、あるいはティカルやカミナルフユのようなテオティワカンと直接的な関係をもっ

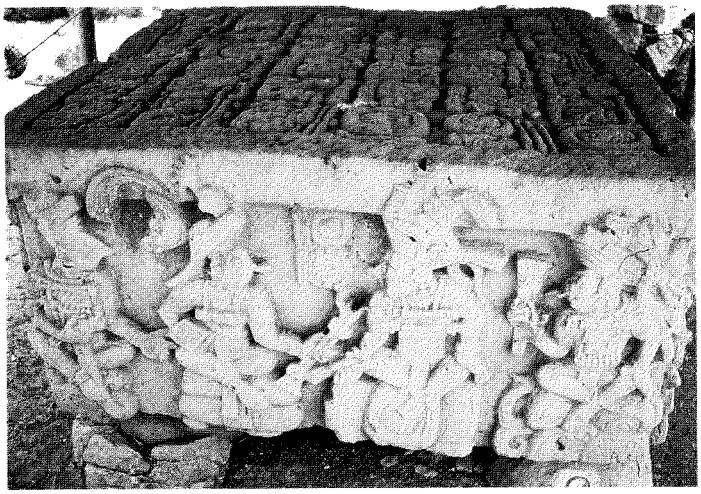

図３　８世紀のコパン遺跡の「祭壇Ｑ」正面。四辺に計 16 名の王が刻まれており、左から２番目が初代キニッチ・ヤシュ・クック・モ王（青山撮影）

表１　マヤ地域の三遺跡における緑色黒曜石製石器の組成

| | ティカル | カミナルフユ | コパン |
|---|---|---|---|
| 石刃 | 450 | 8 | 407 |
| 石刃核 | 4 | 0 | 0 |
| 両面調整尖頭器 | 77 | 16 | 10 |
| 装飾品 | 0 | 61 | 0 |
| 剥片他 | 25 | 0 | 3 |
| 合計 | 556 | 85 | 420 |

た都市出身であったからという解釈が可能である。考古学調査とマヤ文字の解読は、同王が外部出身であったことを裏付ける［Sharer et al. 1999: 20; Stuart 2000: 492］。コパンでは、ティカルやカミナルフユと同様に、テオティワカンの典型的な建築様式であるタルー・タブレロ様式を模した神殿ピラミッドが建設され、テオティワカンとの交流を強く示すメキシコ中央高地産の土器や緑色黒曜石製石器などの遺物やテオティワカン様式の図像が増えた。

ところが、コパンの緑色黒曜石製石器の組成は、ティカルとカミナルフユとは著しく異なる（表１）。特にコパンの両面調整尖頭器の比率（2.4%）は、ティカルの 13.8%［Moholy-Nagy et al. 1984: Table 1］やカミナルフユの 18.8%［Kidder et al. 1946: 136, 138］よりもかなり低い。ティカルではマヤ低地で唯一、緑色黒曜石製石刃核片が出土しており、石刃が地元で製作されたことがわかる。一方、緑色黒曜石製石器は、カミナルフユやコパンへは完成品として搬入された。カミナルフユから出土した装飾品は、石刃片を円形に加工して穴を開けた「シークイン」、つまり衣服などに縫いつけて飾りにする小円形のスパンコールと考えられるが、テオティワカンの典型的な遺物である。こうした

石器組成の違いは、コパン王朝とテオティワカン国家の遠距離交換が、ティカルやカミナルフユのそれとは異なっていたことを示唆する。

マヤ高地の翡翠産地の近くにあるコパンでは、大型の洗練された翡翠製品は支配層の遺構に限られるが、小型の翡翠製品は被支配層の住居跡でも出土している。対照的に緑色黒曜石製石器は、古典期前期（250～600 年）のコパン谷では王家が住んだ中心グループや有力貴族の住居跡だけで見つかっており、都市の後背地にある農民の住居跡では皆無である（図 4）。

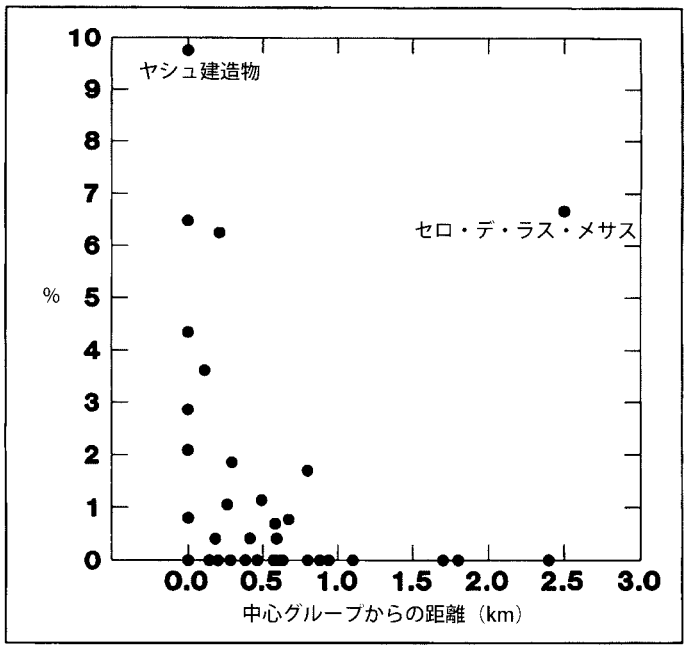


**図 4　古典期前期のコパン谷から出土した黒曜石製石器に緑色黒曜石が占める比率と中心グループからの距離（Aoyama 1999: Figure 7.14 より作成）**

このような少量の遠距離交換品が、経済的に大きな役割をもったとは考えられない。それらは、むしろ世界の中心の神聖な色の威信財として、社会的・象徴的に重要であった。コパンの初期の諸王はコパン谷の貴族の忠誠や後援を得るために緑色黒曜石製石器を再分配し、支配層は権威を強化するために用いた。マヤ地域の別の場所からコパン谷に搬入された多彩色土器も、緑色黒曜石製石器と同様に、王家や有力貴族の住居跡だけで見つかっており、後背地にある農民の住居跡では皆無である［Bill 1997: 543］。このことは、緑色黒曜石製石器が、支配層の威信財であったという仮説を強化する。

都市の後背地では、セロ・デ・ラス・メサスにおいて緑色黒曜石製石器が例外的に多く出土している（図 4）。それは、古典期前期の初頭に創設された山上要塞遺跡で、コパンの中心グループの北西 2 キロメートルの山の上に立地する。ファーシュ夫妻［Fash and Fash 2000: 447-448］は、キニッチ・ヤシュ・クック・モ王と従者らが、セロ・デ・ラス・メサスに要塞を建設してコパン谷を平定した

後に、谷の中央部に中心グループを建設したと推定している。

青山の石器分析の結果は、ファーシュ夫妻の仮説を強化する。第一に、この遺跡から出土した黒曜石製石器に緑色黒曜石が占める比率（6.7%）は、古典期前期のコパン谷で二番目に高い。第二に、セロ・デ・ラス・メサスの黒曜石製石器における石槍の比率（4.4%）は、古典期前期のコパン谷の平均値（0.4%、標準偏差 0.9）より突出して高く、戦争の証拠の一つを提供する。

使用痕分析と出土地点の分析から、古典期前期の緑色黒曜石製石器は、コパンの支配層が愛用した実用品であったことがわかる。緑色黒曜石製石刃は、使用痕分析によれば、皮や木などの加工や調理に用いられた主に実用品であった［Aoyama 1999: 107］。大部分の緑色黒曜石製石器は、住居のゴミ捨て場や建造物の盛土から出土しており、供物や墓の副葬品はごく僅かである。古典期前期のコパンの出土データは、マヤ地域で現在わかっている範囲において例外的といえる。マヤ高地やマヤ低地の他地域では、ほとんど全ての緑色黒曜石製石器は、特別な供物や墓の副葬品として出土している［Spence 1996: Table 1］。コパンの支配層は、産地から遠く離れた地域で最も貴重な石とみなされた翡翠だけではなく、メキシコ中央高地のテオティワカンと関連する緑色黒曜石製石器を愛用した。それは、装飾品としての価値が重視される翡翠にはない実用性だけでなく、権力の象徴である緑色の黒曜石製石器という、大都市テオティワカンから遠距離交換された希少な価値を被支配層に示しやすいためであろう。

コパン谷の緑色黒曜石製石器は古典期前期の後半には減少し、最盛期の古典期後期（600～800 年）までになくなった（図 5）。テオティワカン国家が衰退し、外部出身のキニッチ・ヤシュ・クック・

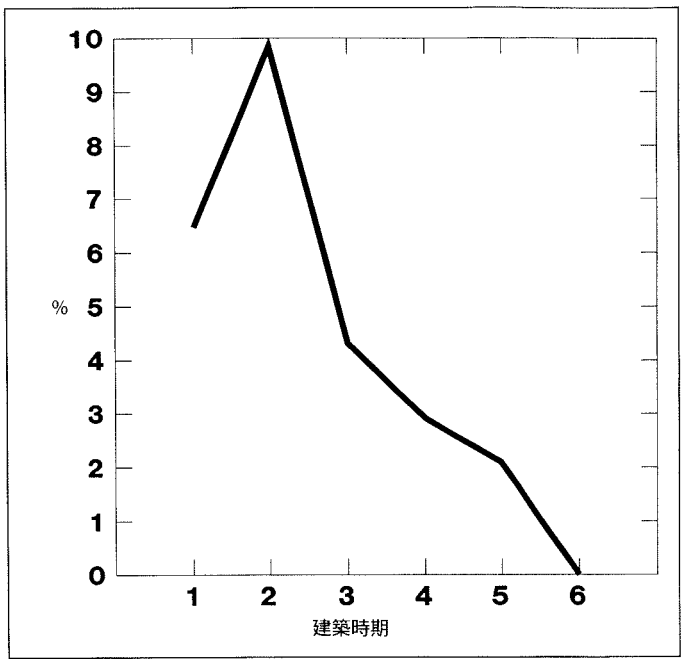


図 5　古典期前期と古典期後期のコパンの中心グループから出土した黒曜石製石器に緑色黒曜石が占める比率の通時的変化（Aoyama 1999: Figure 7.15 より作成）

モ王が創設した王朝が地元に同化するにつれて、あるいは後世の王たちが石碑や大神殿ピラミッドの建造などの他の手段によって権威・権力を確立するにつれて、緑色黒曜石製石器などの遠距離交換品によって権威を強化する必要性が薄れていったためと考えられよう。

9 世紀の初頭に中央集権的な王朝の権威が失墜した後、後古典期前期にコパン中心部の一部が再居住された。古典期前期の後半に衰退した黒曜石の遠距離交換が復活して、メキシコ中央高地のパチューカとメキシコ西部のウカレオ産の黒曜石が、完成品の石刃としてコパン谷に少量搬入された。使用痕分析によれば、後古典期前期の緑色黒曜石製石刃は、古典期と同様に、木や皮の加工や調理に使用された主に実用品であった。ところが遠距離交換が復活しても、コパン王朝が蘇ることはなかった。緑色黒曜石製石器は、後古典期にはマヤ文明の大都市だけでなく、小都市にも広範に分布するようになった［Braswell 2003; McKillop 1989］。後古典期では一部の被支配層が遠距離交換に参加するようになり、海上の遠距離交換網が発達したために、古典期前期に支配層の威信財であった緑色黒曜石製石器は、被支配層にも流通して社会的・象徴的な価値が下がったのである。

## 4. アステカ王国のトルコ石製装飾品の遠距離交換

次に、アステカ王国の交換活動におけるトルコ石の社会的意味と政治経済的な機能について検証しよう。アステカ王国は、後古典期後期（後 1200～1521 年）に現在のメキシコ市を中心に繁栄を極め、スペイン人が 1519 年に侵略した時には、その文化的、政治経済的な影響は、広くメソアメリカの外にまで及んでいた。植民地時代初期に編纂されたアステカの伝説や歴史によると、後に王国の中核的存在となったメシーカ人は北部辺境の出身で、苦難に満ちた長い放浪の旅を経てメキシコ盆地にたどり着いた［Alvarado Tezozómoc 1992］。メシーカ人は守護神ウィツィロポチトリに導かれ、約束の地に主都テノチティトランを建設し、トルテカ文明（後 900～1150 年）を築き上げたトルテカ人の「由緒正しい」血統を引き継ぎ、短期間のうちに勢力を拡大した［井関 2008: 40; Sahagún 1953-81 Book 3］（図 6）。

先述のように、メソアメリカでは先古典期から世界の中心の神聖な緑や青色の石が珍重され、その代表例がマヤ高地を産地とする翡翠であった。しかし古典期後期以降に、遠距離交換網の拡大とともに、メソアメリカでは産出しないトルコ石の価値が高まった。トルコ石は、主にメキシコ中央高地やオアハカ地方において、支配層の装身具や、儀礼道具の装飾として特別な社会的意味を付与されるようになった［Izeki 2008: 55-91］。アステカの神話でも世界の中心は青で象徴され、主要な神々は「トルコ石で囲われた場所に住んでいる」と語られている［Sahagún 1953-81 Book 6］。トルコ石の青は昼間の太陽が軌道を描く空の色でもあり、太陽信仰に関わるアステカの神々や太陽への生贄獲得のために戦う高位の戦士たちは、トルコ石で装飾された装身具を身につけた姿で描写されている［Códice Borbónico 1991］。

トルコ石の産地は、メキシコ盆地から直線距離で 1500km ほど北方に位置する北米南西部にあり、先スペイン期の代表的な産地はニューメキシコ州のセリージョス鉱山である［Weigand 1997: 30］。しかし歴史的には、トルコ石のモザイク加工技術は、古典期後期の後 700 年頃に鉱山地域に近いメソアメリカ北限地域のチャルチウィテス文化で最初に考案され、後古典期前期（後 900～1200 年）にかけて産地近郊で盛んに加工品が生産されるようになった［Weigand 1997: 32］。

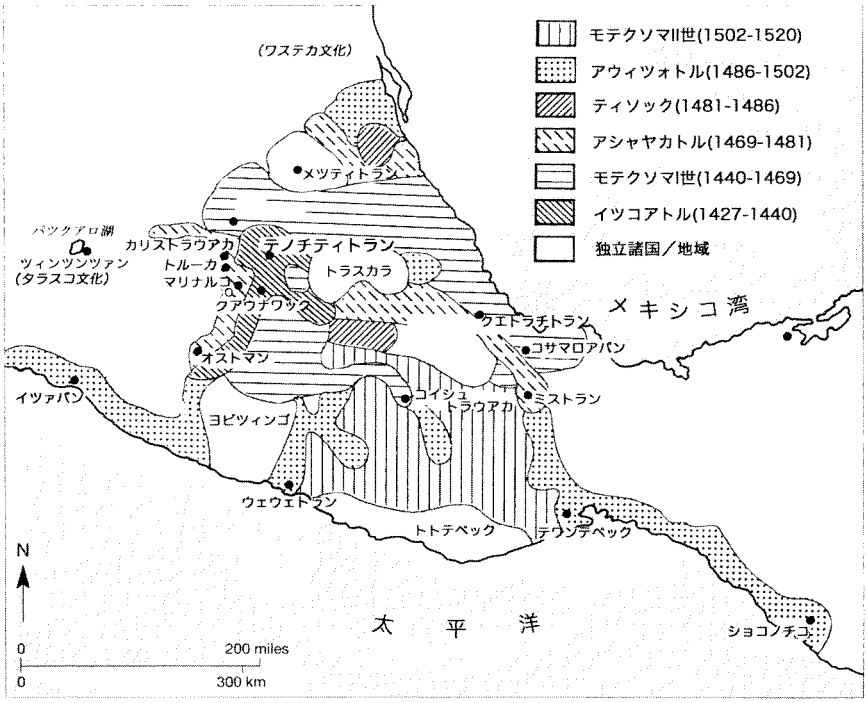


**図6　アステカ王国拡大期のメシーカ王朝史と支配領域の拡大**
**（Townsend 2009 より作成）**

後古典期前期になると、メキシコ盆地で勢力を拡大したトルテカ王国が、トルコ石を求めて鉱山地域との交換活動を活発化させた。この北方との遠距離交換網は「トルコ石ロード」と呼ばれる［Coe and Koontz 2008: 150］。その後アステカ王国が台頭すると、鉱山地域では地元での消費よりも原石や加工製品の搬出に力を入れるようになり、引き換えにメソアメリカの高度な物質文化や技術を享受した［Harbottle and Weigand 1992: 56］。アステカ王国内でのトルコ石の価値の高まりは、流通ルートに位置したメキシコ北部やメキシコ西部の諸文化や、アステカ王国の支配下にあって工芸技術に優れていたオアハカ地方でのトルコ石の需要増加にも影響を与えた［Harbottle and Weigand 1992: 60-61; Pasztory 1983: 275］。

ウェイガンド［Weigand 1997: 27］は、先古典期から後古典期までの約1700年間における、メソアメリカと北米南西部に属するトルコ石の破片（製品に施されたまま残存しているモザイク片を含む）は、百万点以上あると報告している。トルコ石は材質が柔らかいことから、モザイクやビーズに加工され、工芸品の装飾に使用されることが多い［Harbottle and Weigand 1992: 58］。しかし時の経過とともに土台となる木材や布部分が朽ち果て、加工片も粉々になってしまうために、発掘調査で収集することが難しく、この数値も「氷山の一角」といえよう［Izeki 2008: 59］。産地周辺では総出土量は多いが、モザイク装飾の完成品は、メキシコ中央高地やオアハカ地方で製作された木製盾や仮面などの方が、技術面・芸術性においてはるかに高度である（図7）。

井関［Izeki 2008: 55-91］の調査によれば、実際に数えられる形で出土または記録されているトル

図７　トルコ石モザイクで神話的情景が表現された木製盾
（直径 32cm、後古典期後期、スミソニアン博物館蔵　井関撮影）

コ石製装飾品は、メソアメリカ全体でも 400 点余りにすぎない。そのうち保存状態の良いモザイク製品のほとんどは、植民地時代初期に略奪されてヨーロッパに送られたものである。現在は欧米の美術館や博物館に所蔵されており、具体的な生産地や製作時期などが不明な場合が多い。唯一、出土状況が記録され、産地や加工技術が詳細に解明されているのが、主都テノチティトラン出土のトルコ石製装飾品である。

テノチティトランの祭祀地区から出土した遺構や遺物は、アステカ王国の発展の歴史や世界観を物語る。中心部にそびえていたピラミッド型の主神殿は、頂上に二つの神殿を構え、北側が雨の神トラロック、南側がテノチティトランを創設したメシーカ人の守護神で太陽と戦争の神でもあるウィツィロポチトリに捧げられていた（図 8）。メシーカの宗教観は太陽崇拝が中心となっており、人間の使命は太陽に活力を与えるべく生贄の心臓を捧げ続けるためとされ、その生贄を確保する戦争

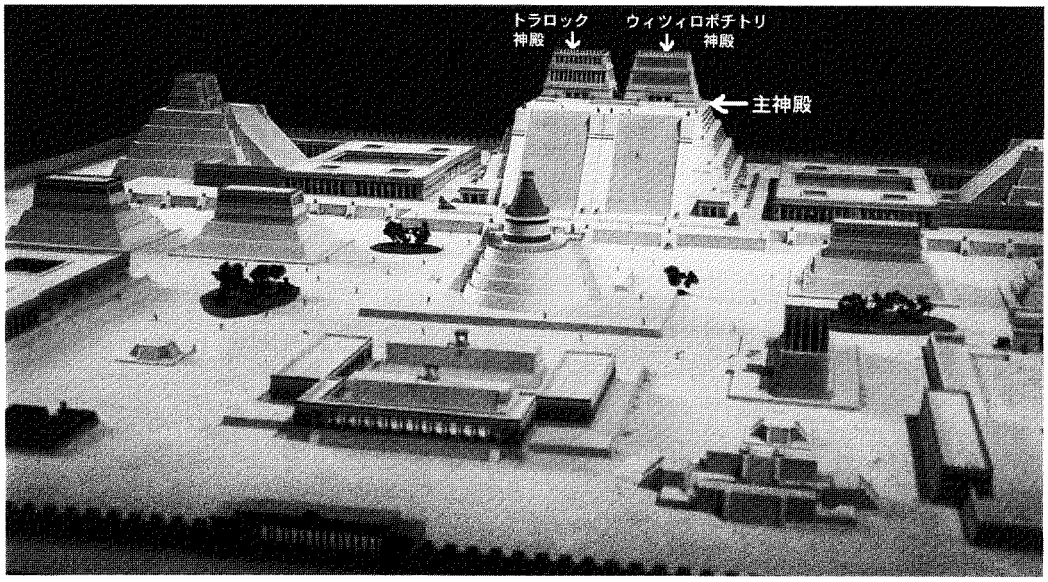


**図８　テノチティトランの祭祀地区と主神殿の復元模型**
**（メキシコ市のテンプロ・マヨール博物館蔵　井関撮影）**

が、実際には政治経済的な勢力の拡大と結びついていた。1978 年から始まった発掘調査では合計 7 回の神殿拡張が確認されており、1428 年に結成された三都市同盟以降のアステカ王国拡大期には大規模な拡張工事が頻繁に行われたことが明らかになっている［Hinojosa Hinojosa 1999; Matos Moctezuma 1988］。

主神殿からは、これまでにスペイン語で「オフレンダ」と呼ばれる 140 組以上の埋納供物、つまり神々への奉納品を収めた石箱や石室が、基壇、階段、神殿部の床下などから発掘されている［López Luján 2005; López Luján and Chávez Balderas 2009］。供物は、神殿拡張記念、旱魃時の雨乞い、神官・支配者の埋葬など、様々な目的で埋納された［López Luján 2005］。供物は、一般的に一段から六段の層で構成された。一番下に水の世界をイメージした海の砂や魚の骨、貝類で構成された層があり、上層になるにつれて徐々に地上的な性格が強くなり、最も構成要素の多い一番上の層には、動物や人間の骨や神々の像が並べられている（図 9）。メソアメリカ各地の産物や動植物、美術品などがふんだんに取り込まれた供物は、アステカの世界観を象徴すると同時に、王国の勢力拡大の過程を反映する［井関 2008: 43］。

トルコ石の遺物は、19 組の供物から合計 165 点発見されている［Izeki 2008: 82-91］。そのうち 15 組の供物が主神殿の南にあるウィツィロポチトリの神殿側から、18 組が王国拡大期の神殿拡張部から出土した。三都市同盟以降のアステカ王国拡大期のトルコ石はセリージョスなどの北米南西部の鉱山産で、かつ主都で原石から加工された［Melgar Tísoc and Solís Ciriaco 2009］。トルコ石が含まれる供物の特徴は、生贄の象徴である人間の頭蓋骨や、人身供犠でナイフとして使用されるチャート製両面調整尖頭器を多く伴うことである。一方で、トラロックの供物に常に含まれる、豊穣の女神を模した土器や大量の珊瑚、そして水の象徴である大量の翡翠はみられない。トルコ石製装飾品は、

図９　供物（メキシコ市のテンプロ・マヨール博物館蔵　井関撮影）

儀礼用チャート製両面調整尖頭器と、戦争と太陽を象徴する円形の盾やそのミニチュア製品が多数を占める［Izeki 2008: 81-91］。

供物の出土地点と組成分析から、トルコ石は、太陽信仰に関連する生贄や戦争の観念を表象していると考えられる。また、植民地時代初期の絵文書や文献史料には、トルコ石製装身具を装着することは、アステカ王国内でも宗教儀礼や政治活動の場で主都のメシーカ支配層だけに許された特権であったことが記録されている［Códice Borbónico 1991; Sahagún 1953-81 Book 8］。メシーカ支配層は、とくに三都市同盟以降に、太陽信仰に関連する儀礼を非常に強調するようになる。これは、人間の心臓と血が太陽神を養うという宗教観をアピールし、生贄を獲得するという大義のもとに儀礼的な戦争と侵略を正当化することで、支配領域をさらに拡大し、より広範な地域から貢納品を得るためでもあった［Berdan and Smith 2003: 67-68; 井関 2012: 218］。

このようなメシーカ独特の世界観を表現するために、先古典期と古典期のメソアメリカで伝統的な威信財であった翡翠に対比させる形で、比較的新しい素材であり象徴性が確立していなかった青石のトルコ石が意識的に選択され、独占的に使用された蓋然性が高い［Izeki 2008: 90, 91, 98-100］。たとえば、トルコ石製装飾品は、マヤ地域ではほとんど出土しておらず、顕著な遺物はチチェン・イツァ遺跡から出土した円形盾のモザイク装飾のみである［Izeki 2008: 74］。北部出身のメシーカ人が、南方のマヤ高地で産出する翡翠ではなく、はるか北方から搬入されるトルコ石に自らのルーツを重ね合わせたともいえよう。また、トルコ石を珍重することは、その遠距離交換を最初に確立し

たトルテカ文明の文化伝統を継承することも意味していた［Izeki 2008: 98-100］。王国拡大期にトルコ石製装飾品が主都で加工生産されるようになったことから、その価値がメシーカ支配層の間で高まったことがわかる［Melgar Tísoc and Solís Ciriaco 2009］。

トルコ石の原石や加工製品は、主に貢納品として主都に持ち込まれた。この貢納システムの発展を通して、広大な遠距離交換網を拡張していった。三都市同盟以降、アステカ王国は経済戦略の一つとして、経済的・文化的に豊かな都市国家をまず征服し、定期的な貢納を課すことで、メキシコ盆地の外への進出を加速させた［Berdan and Smith 2003］。さらに、征服した地域で獲得できる資源、農産物、工芸品だけではなく、その土地とは全く関係のない物資の貢納を義務化することで、その地域に独自の流通網を構築させた。こうした戦略によって、王国自体はインフラ整備や労働力に大きな投資をすることなく、メソアメリカだけではなく圏外への広大な遠距離交換網を発達させることが可能になったのである。

アステカ王国の経済戦略によって支配下に治められた諸都市の貢納品のリストは、『メンドーサ絵文書』［Berdan and Anawalt 1997］に記録されている。たとえば、オアハカ州北西部のヨワルテペックという都市は、戦闘服や盾といった武器や農作物の他に、メソアメリカでは産出しないトルコ石の原石や、それを利用したモザイク装飾の仮面の貢納も課せられていた（図 10）。そこでヨワルテペックは、直接的ではないにしろ、北方の鉱山地域への流通ルートを確立すべく、ルート上にある諸都市との外交活動を円滑にする必要に迫られた［Berdan 1987: 169-170］。その結果、遠隔地の貴重品が貢納品として主都に搬入されるようになり、遠距離交換網も急速に拡充することになった。

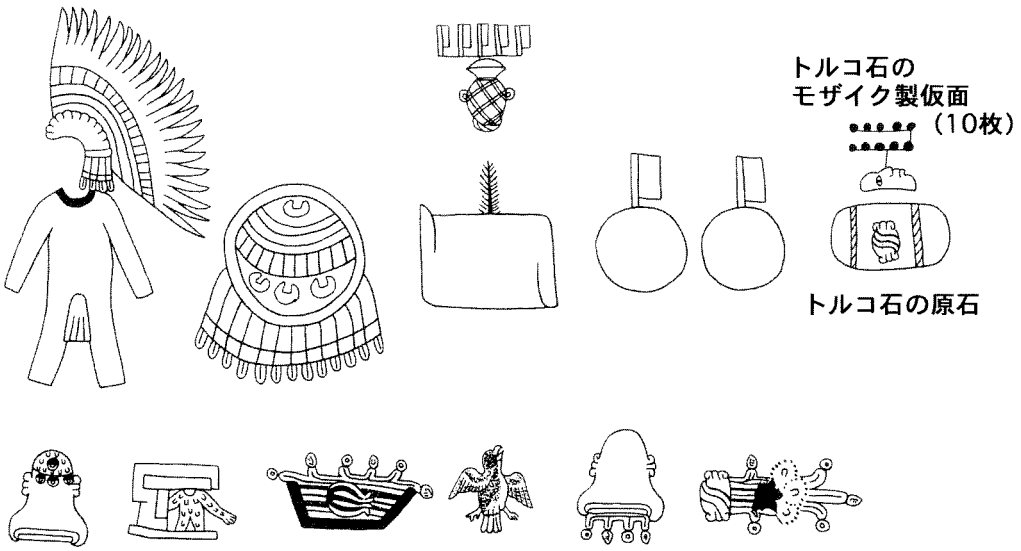


図 10　ヨワルテペックに課せられた貢納品リスト
（『メンドーサ絵文書』Berdan and Anawalt 1997: 85 より作成）

遠距離交換の過程で、トルコ石のような希少価値の高い交換品が市場に流れる場合もあっただろう。ところが後古典期後期のメソアメリカでは、テノチティトランとトルコ石製装飾品の高い加工

技術を有した生産地を除き、トルコ石はほとんど出土していない。地方都市の権力者や庶民は、メシーカ支配層の威信財であったトルコ石を手にすることが禁じられていた［Berdan 1987: 179］。つまりトルコ石は、その政治的、宗教的な価値を発揮できる主都のメシーカ支配層に流通する仕組みになっていたのである。

## 5. 結論

メソアメリカでは緑と青が世界の中心の神聖な色であり、権力の象徴の色でもあったが、文化や時代によって選択された石材が異なった。換言すれば、そこには各王国が参加していた遠距離交換網の地理的条件、つまり王国がそれぞれ「世界」の範囲と認識していた環境要因が作用していた。メキシコ中央高地産の緑色黒曜石製石器は、大都市テオティワカンとマヤ文明の大都市を結ぶ古典期前期の遠距離交換ルートに乗り、少量がマヤ支配層の間を流通した。マヤ高地の翡翠産地の近くにあるコパンでは、古典期前期の前半に統治した初期の諸王が、地元の貴族の忠誠や後援を得るために緑色黒曜石製石器を再分配し、愛用した。コパンの支配層は、装飾品としての価値が重視される翡翠にはない実用性だけでなく、権力の象徴である緑色の黒曜石製石器という社会的・象徴的に重要な威信財を占有し、当時のアメリカ大陸最大の都市テオティワカンとの交流や関係を被支配層に誇示することによって権威を強化した。

古典期前期の後半にはテオティワカン国家が衰退する一方で、コパンの後世の王たちが権威・権力を確立するにつれて遠距離交換品によって権威を強化する必要性が薄れたために、コパン谷では緑色黒曜石製石器は減少し古典期後期までになくなった。後古典期には一部の被支配層が遠距離交換に参加し、海上の遠距離交換網が発達したために、緑色黒曜石製石器は被支配層にも流通して威信財としての社会的な価値が下がり、マヤ文明の大都市だけでなく、小都市にも広範に分布するようになった。

アステカ王国におけるトルコ石は、メシーカ支配層という消費者や威信財という用途が限定されていたために、宗教観や世界観の変化と深く関連すると同時に、王国が発展する過程で政治経済的に大きな役割を果たした。すなわち、トルコ石製装飾品は太陽信仰と戦争を体現するとともに、威信財としてメシーカ支配層の神性を高め、拡大していくアステカ王国の政治力を象徴した。トルコ石鉱山地域との交換網の発展には、先行する中央高原諸文化の伝統が反映されている。メシーカ支配層は、翡翠という緑・青色石を珍重する伝統を引き継ぎつつ、トルコ石という新しい石材に新たな価値を付与して自文化を差別化した。そしてアステカ王国の主都におけるトルコ石の需要増加は、メソアメリカを超えた広大な遠距離交換網が発展する原動力となり、スペイン人到来時まで、王国の認識する「世界」も拡大し続けたのである。

【謝辞】

本論は、平成 21-25 年度科学研究費補助金新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」（領域代表：青山和夫）と平成 21-25 年度科学研究費補助金基盤研究 B「マヤ文明の政治経済組織の通時的変化に関する基礎的研究」（研究代表：青山和夫）の成果の一部である。

# 参考文献


Alvarado Tezozómoc, F.

1992 *Crónica Mexicáyotl*. Universidad Nacional Autónoma de México, México.

青山和夫

2007 『古代メソアメリカ文明　マヤ・テオティワカン・アステカ』講談社，東京.

2012a 『マヤ文明　密林に栄えた石器文化』岩波書店，東京.

2012b 「マヤ文明と環境変動」『第四紀研究』51(4): 197-206.

Aoyama, K.

1994 Socioeconomic Implications of Chipped Stone from the La Entrada Region, Western Honduras. *Journal of Field Archaeology* 21:133-145.

1999 *Ancient Maya State, Urbanism, Exchange, and Craft Specialization: Chipped Stone Evidence from the Copán Valley and the La Entrada Region, Honduras*. University of Pittsburgh Memoirs in Latin American Archaeology No. 12, Pittsburgh.

2001 Classic Maya State, Urbanism, and Exchange: Chipped Stone Evidence of the Copán Valley and Its Hinterland. *American Anthropologist* 103: 346-360.

Berdan, F. F.

1987 The Economics of Aztec Luxury Trade and Tribute. In *The Aztec Templo Mayor*, edited by E. H. Boone, pp. 161-183. Dumbarton Oaks Library and Collection, Washington D. C.

Berdan, F. F. and P. R. Anawalt

1997 *The Essential Codex Mendoza*. University of California Press, Berkeley.

Berdan, F. F. and M. E. Smith

2003 The Aztec Empire. In *The Postclassic Mesoamerican World*, edited by M. E. Smith and F. F. Berdan, pp. 67-72. The University Press of Utah, Salt Lake City.

Bill, C.

1997 Patterns of Variation and Change in Dynastic Period Ceramics and Ceramic Production at Copán, Honduras. Ph. D. dissertation, Tulane University.

Braswell, G.

2003 Obsidian Exchange Spheres of Postclassic Mesoamerica. In *The Postclassic Mesoamerican World*, edited by M. E. Smith and F. F. Berdan, pp. 131-158. University of Utah Press, Salt Lake City.

Carmack, R. M., J. L. Gasco, and G. H. Gossen

2007 *The Legacy of Mesoamerica: History and Culture of a Native American Civilization*. Second Edition. Prentice Hall, Upper Saddle River, New Jersey.

Códice Borbónico

1991 *Códice Borbónico*. Introduction and Explanation by F. Anders, M. Jansen, and L. Reyes García. Sociedad Estatal Quinto Centenario, Spain; Akademische Druck- und Verlagsanstalt, Austria; Fondo de Cultura Económica, Mexico.

Coe, M. D. and R. Koontz

2008 *Mexico*. Sixth Edition. Thames and Hudson, London.

Fash, W. and B. Fash

2000 Teotihuacan and the Maya: A Classic Heritage. In *Mesoamerica's Classic Heritage: From Teotihuacan to the Aztecs*, edited by D. Carrasco, L. Jones and S. Sessions, pp. 433-463. University Press of Colorado, Boulder.

Harbottle, G. and P. C. Weigand

1992 Turquoise in Pre-Columbian America. *Scientific American* 266(6): 78-85.

Hinojosa Hinojosa, J. F.

1999 Hundimiento del Centro Histórico de México-Tenochtitlan. *Creación & Cultura. Revista Internacional de Arquitectura, Artes, Diseño* 1(2): 23-34.

本谷裕子

2012 「グアテマラ高地マヤ女性の織りと装いの文化的意義を問う—レジリアンスを視座に」『第四紀研究』51(4): 207-214.

Inomata, T., D. Triadan, and O. Román

2010 La Transformación y Continuidad de Ritos durante el Período Preclásico en Ceibal, Guatemala. In *El Ritual en el Mundo Maya: de lo Privado a lo Público*, edited by Ciudad Ruiz, A., et al., pp. 29-48. Sociedad Española de Estudios Mayas, Madrid.

井上幸孝

2012 「アステカ社会と環境文明史—メソアメリカ自然観の理解にむけて—」『第四紀研究』51(4): 223-230.

井関睦美

2008 「アステカ・テノチティトラン主神殿出土のトルコ石の象徴性」『古代アメリカ』11: 35-46.

2012 「アステカ王国史における自然災害と環境認識の変容」『第四紀研究』51(4): 215-222.

Izeki, M.

2008 *Conceptualization of 'Xihuitl': History, Environment and Cultural Dynamics in Postclassic Mexica Cognition*. BAR International Series 1863. Archaeopress, Oxford.

Kidder, A., J. Jennings, and E. Shook

1946 *Excavations at Kaminaljuyu, Guatemala*. Publication No. 561. Carnegie Institution of Washington, Washington, D.C.

Lange, F. W., ed.

1993 *Precolumbian Jade. New Geological and Cultural Interpretations*. University of Utah Press, Salt Lake City.

Laporte, J.

1988 El Complejo Manik: Dos Depósitos Sellados, Grupo 6C-XVI, Tikal. In *Ensayas de Alfarería Prehispánica e Histórica de Mesoamérica*, edited by M. C. Serra and C. Navarrete, pp. 97-188. Universidad Nacional Autónoma de México, México.

López Luján, L.

2005 *The Offerings of the Templo Mayor of Tenochtitlan*. Revised Edition, translated by B. R. Ortiz de

Montellano and T. Ortiz de Montellano. University of New Mexico Press, Albuquerque.

López Luján, L. and Chávez Balderas, X.

2009 In Search of Mexica Kings: Current Excavations in Tenochtitlan. In *Moctezuma. Aztec Ruler*, edited by C. McEwan and L. López Luján, pp. 294-299. The British Museum Press, London.

Matos Moctezuma, E.

1988 *The Great Temple of the Aztecs*, translated by D. Heyden. Thames and Hudson, London.

McKillop, H.

1989 Coastal Maya Trade: Obsidian Densities at Wild Cane Cay. *In Prehistoric Maya Economies of Belize*, edited by P. A. McAnany and B. L. Isaac, pp. 17-56. Research in Economic Anthropology, Supplement 4. JAI Press, Greenwich.

Melgar Tísoc E. R. and R. B. Solís Ciriaco

2009 The Manufacturing Techniques of the Turquoise Mosaics from the Great Temple of Tenochtitlan, Mexico. Paper presented in LASMAC and Archeological and Arts Issues in Materials Science, Cancun, Mexico.

Miller, M. and K. Taube

1993 *An Illustrated Dictionary of the Gods and Symbols of Ancient Mexico and the Maya*. Thames and Hudson, London.（『図説マヤ・アステカ神話宗教事典』武井摩利訳、東洋書林、2000 年）

Moholy-Nagy, H., F. Asaro, and F. Stross

1984 Tikal Obsidian: Sources and Typology. *American Antiquity* 49: 104-117.

Pasztory, E.

1983 *Aztec Art*. Harry N. Abrams, New York.

Sahagún, B.

1953-81 *Florentine Codex*. Translated by A. J. O. Anderson and C. E. Dibble. 12 Books. Monographs of the School of American Research, Santa Fe.

Santley, R.

1989 Obsidian Working, Long-Distance Exchange, and the Teotihuacan Presence on the South Gulf Coast. In *Mesoamerica after the Decline of Teotihuacan A.D. 700-900*, edited by R. Diehl and J. Berlo, pp. 131-151. Dumbarton Oaks, Washington, D.C.

Sharer, R., L. Traxler, D. Sedat, E. Bell, M. Canuto, and C. Powell

1999 Early Classic Architecture beneath the Copán Acropolis: A Research Update. *Ancient Mesoamerica* 10: 3-23.

Sheets, P.

1978 Artifacts. In *The Prehistory of Chalchuapa, El Salvador* Vol. 2, edited by R. Sharer, pp. 1-131. University of Pennsylvania Press, Philadelphia.

Spence, M.

1996 Commodity or Gift: Teotihuacan Obsidian in the Maya Region. *Latin American Antiquity* 7: 21-39.

Stross, F., P. Sheets, F. Asaro, and H. Michel

1983 Precise Characterization of Guatemalan Obsidian Sources, and Source Determination of Artifacts

from Quirigua. *American Antiquity* 48: 323-346.

Stuart, D.

2000 "The Arrival of Strangers": Teotihuacan and Tollan in Classic Maya History. In *Mesoamerica's Classic Heritage: From Teotihuacan to the Aztecs*, edited by D. Carrasco, L. Jones and S. Sessions, pp. 465-513. University Press of Colorado, Boulder.

2011 *The Order of Days: The Maya World and the Truth about 2012*. Harmony Books, New York.

Thouvenot, M.

1982 *Chalchihuitl. Le Jade chez les Aztèques*. Institut d'Ethnologie, Paris.

Townsend, R.

2009 *The Aztecs*. Third Edition. Thames and Hudson, London.

Weigand, P. C.

1997 La Turquesa. *Arqueología Mexicana* V(27):26-33.

米延仁志・青山和夫・高宮広土

2012 「環太平洋の環境文明史の視野と趣旨」『第四紀研究』51(4): 195-196.

原稿受領日　2012年９月20日
原稿採択決定日　2012年10月２日